

## 私の被爆体験

戸田一郎

(二〇〇四年八月一日 平和を祈る会での証言)

昭和一八年四月に、私は岩国市の小学校から広島の中学校に入学しました。父親の会社の本社が広島市にあり、又父の実家もそうでしたので、転勤の多い父親にしてみれば、広島市ならば転校をさせることになるようなことにならないだろうということではなかったかと思うのですが、入学と同時に寮生活になりました。ところが翌一九年四月に父親が他界したため、母と妹は広島に転居し、白島東中町に小さな家を借りまして三人で住まうこととなりました。その頃から第二次大戦も激しくなり、呉市にはアメリカ軍の航空機による爆撃も激しくなりました。夜は私の家から南の空が明るくなるほどの焼夷弾攻撃が見られるようになりまして。それこそ「対岸の火事」そのものでした。今考えると本当に申し訳ないと思います。人の痛みの方からない中学生といってしまうべきでしようが、焼夷弾が雨の如く降る中を逃げまどう人達のことを想像するだけで今は、背筋が寒くなるのを覚えます。それでも、広島市内には時折、米軍の艦載機が飛来し、機銃掃射を浴びせたり、爆弾を落としたりしての空襲がありました。余りよくは覚えていないのですが、機銃掃射の音を聞いて、あわてて防空壕(その頃には、狭い庭に幅、深さ各九〇糎、長さ二五〇糎ほどの穴を掘り、上に戸坂と土をかぶせて防空壕を作っていました)に飛び込んだり、爆弾が投下された跡の穴を見に行ったりしたような記憶もあるのですが。

それでも、戦時下という切実な意識はなく、授業はなく、工場へ通って、旋盤を回していれば時間が過ぎていくような日々でした。つまり、戦争は隣の国の話であり、勉強はしなくていいし、工場へ行けば、昼食は食べさせて貰えるし、余り美味しくはないが、おやつのだんごは貰えるしの日々でしたから、出来の悪い中学生としてはそう悪い状況だとは思いませんでした。

話が前後しますが、昭和一九年、つまり二年生になってからは、佐伯郡の各地へ泊まり込みで農作業の手伝いにも行きました。もうその頃は、農村は若い男は皆召集されて戦地に駆り出されており、残されたのは老人や女、子供ばかりという状況でしたから、私たちは頼りにされ、又私たちも腹一杯食べさせて貰えるということもあって喜んで出かけたものでした。どれだけお役に立てたか分かりませんが、何か、頼りにされているのだという満足感だけはあったように思います。

関東方面や阪神方面での空襲が激しくなるにつれて、広島も二部隊があるから、空襲も近いかも知れない。学校の校舎を夜間の空襲から守るために、二年生から四年生までの各クラスが半数ずつ夜間の警備をすることとなり、交代で宿直をすることとなりました。五年生は、練り上げ卒業となって、そのまま軍隊へ入隊、一年生は、田舎へ集団疎開と、校舎は完全に空き家となっております。

その年の一二月頃から、三菱重工業広島精機工場(私たちは祇園の三菱と呼んでいました)へ学徒動員で行くことになり、机上学習と実習を各一箇月位して現場に配置されて、旋盤工として兵器の部品作りを致しました。勿論、どの兵器のどの部品と言うことが分かるはずもなく、又教えてくれるものでもありません。どの程度正確なものが出来たのか、これ又怪しいものですが、それでもノギスとかいう計器を使ったりして一生懸命サイズを測り、旋盤を使って鉄を削ったものです。この工場でも、昼食と午後のおやつを戴けましたので、おやつといっても雑草と小麦粉をまぜたような団子でしたが、お腹をすかした中学生には本当に有り難いところでした。

同級生の中でも、成績の良かった人達は、各クラス数人ずつが選ばれて、又県内の各学校から選ばれた人達と共に、科学学級(別名秀才学級)が編成されて、比婆郡東城町へ疎開していき勉学を続けておりました。

昭和二〇年四月に三年生に進学したのですが、進学といっても学校に行って勉強をするわけでも、上級生や新入生たちの顔を見るわけでもないので、中学生という意識も段々と薄くなるような気がしました。しかも、わたしたちは、入学したときから、黒の学生服ではなく、カーキ色の穀物袋のような、目の荒い生地で作ったから余計にそう感じていたのかも知れません。それでも、可部線の祇園駅から工場までの往復は、二列縦隊になって行進をさせられ、今考えると自分の時間は、自宅にいる時間と自宅から横川駅への往復の三〇分弱だけだったように思います。そういった中で、学校での宿直をするのですが、その時は、工場で昼食を食べて一旦帰宅し、夕方六時に学校に集合します。教室では、既に

机は後に積み上げて片づけてありますので、その空いたところに毛布を袋状に折ったものを引き、その中に寝ます。宿直勤務中に空襲警報が鳴ると翌日は休み、警戒警報だけだと午後工場へ出勤と決められておりました。誰も口にしたことばありませんでしたが、私は空襲警報のサイレンが鳴ることを期待しておりました。不心得者と叱られそうですが、前にも述べましたように、戦時下というものの、それは中国大陸や南方の地域のことであり、命に関わるようなことが身近に起こることなどは認識できませんでした。

当時、私の住んでおりました家は、牛田の対岸の川端にありまして、そこにはザリガニが沢山いて、それをとっては夕ご飯のおかずにしておりましたので、日中が休みだと、そのザリガニ取りが出来るという楽しみがあったからです。八月五日の午後はいつものように、工場で昼食を取り帰宅、一休みをしてから、約二キロメートルを歩いて登校し勤務に就きました。勤務といっても、校内をざっと見て回り、雨天体操場で先生からの訓示を聞いて、後は教室でわいわいがやがやの時間を過ごすわけです。戦時下であり、何時空襲があるか分からないと言う状況にあることは事実なのですが、その状況もマンネリ化して、緊張の中で過ごしているはずなのにそうでもないという時間を過ごしております。ただ、敵機が目撃になるからと、電氣の使用と窓に張った黒幕については、電氣の光が外部に漏れないようにと、やかましくいわれました。

今考えても、およそ戦争とは関係のない世界にいたという感じがします。就寝中に二回くらい空襲警報が発令され、起こされて運動場に出て待機をしたのですが、無事に勤務を終えることが出来ました。

小学校は、既に教室が閉鎖（多分、二十年の四月からだっと思うのですが、ひよっとすると十九年の九月かも知れません）、授業が無くなり、母と妹は私の実家の世羅郡津名村（現在の三次市三和町）に疎開をしており、私は父方の祖母と一緒に生活しておりました。その祖母の依頼で、翌朝は千田町にありました父の実家に行き、そこで朝食を食へました。その家の台所は十二畳くらいの広さがあり、三世代の食事が出来るような大きな食事がありました。朝食を終わりと、祖母の言づても済ませて伯母と雑談をしているときでした。左手後の方で、電氣がショウトしたような青白い強い光が走りました。思わず振り返ったとき、轟音と共に真っ暗になってしまいました。

てっきり、側に爆弾か、焼夷弾が落ちたのだと思い、目と耳を両手でおそい身を伏せました。その後は何も音がせず、何とはなしに静かなので、逃げなくてはと身を起こしました。そしておそるおそる目を開けて、上半身を起こして周囲を見回すと暗さの中にポウーと明るさが見えるので、その時、背中が重く何かが落ちかかっていたらしいのですが、そんなことを考える暇もなくそちらに向かって駆け出しました。当時伯父もいたはずなのですが、伯父や伯母のことを考える余裕など無く外に飛び出していました。勿論板の間も座敷も、物が倒れたり、落ちたりしていたと思うのですが、何も覚えておりません。ただ、前の道路に出たとき、その道路は木材や坂で覆われておりその上を靴下のままで走って吉島の対岸の川土手まで出ました。後で聞くと、私と話していた伯母は、後の流し台へたきつけられたもの大した怪我もなく、伯父は、二階のベランダで植木鉢に水をやっていたので、爆風に吹き飛ばされて中庭に落ち、腰を打撲したものの大したことはなかったそうです。

今考えると、現在の広島電鉄本社北側の電車車庫の入り口の向側あたりを西に入った道路の突き当たりに出たわけです。そこは既に多くの人でごった返す地獄でした。真っ黒い顔をした人、顔や上半身に灰色の薄いボロを下げたようにヤケドをしてはがれた皮膚がぶら下がった人、壊れたガラスなどで傷ついたのか血塗れになって茫然と立った人など、今見たら恐らく気を失うのではないかと思うような惨状でした。私は、別に痛いところもなく元気でしたが、そのように苦しんでいる人達に手を述べ余裕など無く、一時も早く安全なところに逃げることを考えておりました。それも具体的に行き先を決めていたわけではなく、ただ人の流れに従って歩いていただけです。白島の自宅へ帰ることも考えたのですが、「街のほうは、もう火の海になっている」という声が聞こえたので、何はともあれ街の中から抜け出すことを考えなければと思いました。多くの人の流れは安全なところへ向かっているのだと思ってその流れに入れば助かるという思いでした。それよりも何よりも、私は中学入学までは、広島市には殆ど来たこともなく、中学校に入ってから寮と学校、自宅のある白鳥と学校、自宅から動員先へ行くための横川駅までの遺しか知らない、といった状況でしたからそうするしか考えが浮かばなかったと思います。

そして、安村（今の安古市町安）の川本家にたどり着くことが出来ました。川本さんは、亡き父と同じ職場におられた方で、当時は召集されて戦地に赴いておられました。奥さんとお子さんは、岩国に残っておられたので、そのご実家に転げ込んだというわけです。それこそ、真っ黒い顔をした誰とも分からない男が転げ込んだのですからさぞ驚かれたと思うのですが、事情をお話すると分かって下さったようで、昼食を用意して下さり休ませて下さいました。どうして川本家だったのかはよくは覚えていないのですが、多分、母が田舎に帰るとき、何かあったら川本さんのお宅を頼るようになっていたのではないかと思います。

川本家にたどり着くまでは、見えても見えず、聞こえても聞こえずという状態だったのですが、一寝入りさせていたから、広島市内の方を見るとものすごい煙が、何本も空に向かってまっすぐにあがっていくのが見えました。そして夜には、空が赤くなって、町中が焼けていることを思い知らされるものでした。

翌朝、朝食をご馳走になって、八時過ぎに川本家を出発しました。その時になって前日、何も履かずに地獄のような世界の中を歩いてここまで来たのだと、よく怪我もなく来たものと自分でも驚きました。川本さんのお宅で女性用の雨靴の古いのを載いで出発しました。今度は可部線の線路を見失わないように歩き、安古市から、祇園、三滝、横川と出て、そこからいつもの道を自宅まで歩きました。私の住居は太田川の土手の側に、ぼつんと立っておりまして、焼けてはいないだろうと期待して帰ってみたのですが、水道管とセメント製の流しがぼつんと立っているのみで、何も無い小さな焼け跡でした。後で聞いたことですが、私の家は、原爆の破裂と同時に押し倒され、出火したとのことでした。近所に母の叔母が住んでおりましたが、その家は道路より低い川縁にありまして、庭には様々な植木を構えておりましたので焼けることもなく、同様な家四軒が残ってありました。何はともあれ、私が元氣だったことを報告しましたが、大叔母はともかく、大叔父は庭に出ていて、顔の右側の一部に火傷を負い、二十歳の養女は、陸軍病院に出勤をしているとのことでした。祖母は、食事の後かたづけで台所に立っていたそうですが、家諸共に吹き倒されたような形で、下敷きになったそうです。しかし、アバラやだったために余り重いものが落ちることもなく、這い出して大叔母の家へ避難することが出来たとのことでした。夕方、母と妹が、心配をして田舎から出てきてくれました。広島に、爆弾が落とされたことを近所の人が報せてくれたそうですが、詳しいことは何も分からなかったようです。その内に、どうも大きな爆弾が落とされて、広島は全滅らしいという情報も流れたそうです。母は、何はともあれと、竈にあったご飯をむすびにし、二、三升の米を入れて徒歩で芸備線の甲立駅までの一〇キロの道を妹と共にでかけたそうです。なんとか列車には乗れたようですが、広島駅までは行けないので、矢賀駅で降ろされ、そこから徒歩で白鳥にたどり着いたのは夕方五時を過ぎておりました。母は私の顔を見て安心はしたようですが、母の叔母（大叔母）の養女が、陸軍病院へ出かけたまま、なんの連絡もないとのこと、翌七日の日も消息を求めて朝から出かけて行きました。父の実家から、伯母が来てくれました。伯父の怪我は大したことはなく、その他はみんな無事であったことを知ることが出来ました。

翌八日に、母と二人で田舎に帰りました。といっても、広島駅は、市内から出ようとする人達でごった返しておりました。又、広島島の惨状を聞いて、親戚を訊ねる人や、被災者の救援に出てきた人達も大勢おられたのでしよう。列車の時刻表はあったはずですが、人を乗せることの出来る列車が入横すれば、どっと人が押しかけるという状態で、母と私は人の波にもまれながら、やっとの思いで無蓋車に乗せて貰えました。炎天下に太陽光線を遮るものもない無蓋車、今という石炭をつんで走っている貨物列車ですが、その煤煙と照りつける太陽のもとで、列車の走る方向に背中を向け、じつと目的地に着くの待つという状況でした。少しでも早く広島から抜け出したい、早く甲立へ着かないかとの思いで前を見たいのですが、何様石炭車のごとで、煤煙が日にはいるので前を向けませんでした。有り難かったのは、途中の駅で列車が止まったときに、その近所の婦人会の方達が、お茶を振る舞って下さったことでした。熱いお茶、冷たいお茶と色々でしたが、本当に生き返る思いでした。同じ貨車に、負傷された方や、お年寄りがいらっしやいました。涙を流したり、手を合わせたりして感謝される姿ほ、今でも日に浮かびます。二時間近く、乗っていたと思うのですが、その間に、息を引き取られる方もあったようで、名前を呼ぶ声や、すすり泣きの声が聞こえてきました。

わたしたちは、甲立から約十キロメートルの道を歩いて実家にたどり着くことが出来ました。

母は、翌朝、再び広島に出かけていきました。白島の大叔母の娘を捜すためでした。大叔父は、自宅の庭で被爆し、顔面の左側を火傷をしており、大叔母はその介護と自宅の整理で身動きがとれなかったのです。しかし、十三日まで市内の救護所を探し回ったそうですが、遂に見つけることが出来ず、帰って参りました。大叔父夫婦は、娘はこのあたりで被爆し、亡くなったのであろうという事で、骨を集めて高田郡の田舎に持ち帰り、墓所に墓を建て、毎朝、毎晩お参りしておりました。それも、十年を経ずして、相次いで他界して、今は親戚の手で丁寧に守られております。

私は、翌日は一日中寝てばかりで、お手伝いさんが随分心配をされたようでした。その後は何をする気力もなく、毎日縁側に座って庭や、対岸の山をボーとして見ているという状況でした。

これが私の、被爆の体験です。大都市を中心に、数え切れないほどの空襲があり、爆弾や焼夷弾が、何十万発、何百万発も落とされて、それこそ何百万の人達が殺され、傷ついたのと、一発の原子爆弾で、一つの都市が廃墟になったこと、何十万の命が失われ、より多くの負傷者が出たことの違いはなんだったのでしょうか。戦争をすれば、それに巻き込まれる、多くの力無き無防備の人達は、命を失うか、負傷をします。原子爆弾や水素爆弾は、そういった直接の被害に遭わなかった人達、特に無傷だった人や、救護のために被爆地に入った人達に、目に見えない放射線照射という恐ろしい被害を及ぼすということです。これは、目にも見えない、痛くもない、それこそ悪魔におそわれるようなものです。

それは、広島市周辺から、八月六日とそれ以後に家族、親戚や友人を捜しに、又、救護や跡片付けの為に広島市内に入られた多くの人が、異常な疲れや、発熱などから、原因も知らされずに亡くなられた事実が何よりの証明です。

夏になると皮膚に斑点が出るとか、内臓の調子がおかしくなるとかという方もおられます。しかし、年を経るに従って、そのようなことを口にすることもなく、多くの被爆者は不安の中で生きておられます。それは、お医者様に相談しても治療の効果が無く、毎年のことなので、なるがままという諦めに他なりません。

私も、会社勤めをする頃から、両腕に小さな斑点が出ました。夏でしたが日に焼けて、気をつけてみないと分からないくらいに斑点でしたから、半袖で過ごすことが出来ました。しかしそれだけに、何か悪い病気ではないだろうか、ひどくならなければという不安にかられました。それも、この四、五年は出なくなったので、何もなかったのかと安心をしてみたり、今度は別な形で何かがあるのではと、不安を完全に払拭することは出来ません。年寄りの冷や水と笑われそうですが、口にしてもどうにもならないことだけに内にこもってしまいます。

私は、本当の平和とは、なんの不安も心配もない、笑顔で日々を過ごせることだと思えます。そういった世界を、この地球上に求めることはもう出来ないのでしょうか。広島や長崎の原爆による死亡者、マーシャル群島の水爆実験による死亡者の人達の声なき声は何時になっただらかなえられるのでしょうか。終わります。